The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代ミャンマーにおける「ナッ世界」の民族誌
Author(s)	山本, 文子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61436
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　山本文子　　）	
論文題名	現代ミャンマーにおける「ナッ世界」の民族誌

論文内容の要旨

本論考の目的は、ミャンマーにおいて王朝時代に枠組みが形成された精霊（ナッ）の世界（以下「ナッ世界」とする）が、王朝崩壊後に伴い、どのように変容してきたかを明らかにすることである。ナッ世界は王朝時代から存在し、仏教の伝来とともに「規格化」された。王朝によって規格化されることで、ナッ世界は統合されてきた。このようなナッ世界を「想像の共同体」としてのナッ世界とする。しかしながら、王朝は1886年に崩壊し、その後霊媒は劇的に増加し、個々で活動するようになる。霊媒たちはそれぞれの実践を自ら規定するようになり、王朝時代に構築されたナッ世界は解体し、分裂していった。このようなナッ世界を「実践共同体」としてのナッ世界とする。本論考では、王朝と密接な現代においてナッ世界は分裂する一方で、霊媒は個々に活動する一方で、王朝時代の枠組み　宮殿儀礼を再統合の試みと捉え、統合と分裂という相反するベクトルにことを指摘した。

本論考は、1章と6章が問題提起と結論で、2章から5章が大きなナッ世界（2章、5章）と小さなナッ世界（3、4章）の具体的な記述である。以下では2章から5章の内容を述べる。

2章では、おもに王朝時代においてナッ世界が国家によってどのように統合されてきたかを述べる。ナッ世界は仏教伝来（11世紀）以前からビルマに存在していた。仏教伝来に伴い、ナッ世界は王朝によって「読める（legible）」ように規格化されてきた。王朝は、ナッ世界を外部性また異常性の象徴とし、慰撫の対象とすることで支配下に置いてきた。慰撫すべき対象は「37柱のナッ」として規定され、王朝はナッの祀り方を明文化させた。王朝はナッ世界を規格化し、王朝がナッ世界を統合していった。その後王朝は1886年に崩壊し、ナッ世界は近代化のなかで未開の世界として隔離された。他方で、1990年代以降は市場経済への復帰に伴い、経済的な利益を求める人の増加に合わせて霊媒も激増した。霊媒の個別の活動が顕著になり、ナッ世界も分裂した。

3章と4章では、分裂したナッ世界（「実践共同体」としてのナッ世界）を取り上げた。3章では現在霊媒として活動するウーキンマウントゥッに焦点を当て、彼のライフヒストリーを記述した。現代においてナッ世界は奇異な習慣として隔離されているが、彼は仏教の枠組みでナッを「読み」、彼は自分のそうした世界観を「正しい」と言う。彼が自分の世界観を「正統的」なものだと考え、ほかの霊媒との明確な差別化を行っていることを述べた。

4章では霊媒を中心にどのように集団が形成され、いかなる活動を行っているかを述べた。現在主に都市部では精霊が福因として語られており、そのような状況下において師弟関係によって集団が形成されるようになっていること、また師弟関係においてナッダマズィンと呼ばれる個人儀礼にまつわる知識や技術の核が継承されるようになっていることを明らかにした。このナッダマズィンは霊媒ごとに異なり、霊媒にとって自分が継承するナッダマズィンこそ正統である。つまり霊媒にとって、それぞれの師弟関係の系譜で継承されるナッダマズィンは相容れるものではなく、ナッ世界が分裂していっていることを明らかにした。

5章では宮殿儀礼という全国から霊媒が集まる儀礼に焦点を当て、分裂したナッ世界が再び統合される局面を扱った。宮殿儀礼では、王朝時代に成立した、ナッを王と見立てて作られた擬似宮廷システムを中心に、擬似王朝が再演されており、「想像の共同体」としてのナッ世界の再構築の試みに見えることを示した。他方で、大臣の継承原理および一般の霊媒に対して導入された諸制度から、宮殿儀礼において「実践共同体」としてのナッ世界の象徴である師弟関係およびナッダマズィンの概念が抜けがたく入り込んでいることを示した。宮殿儀礼は、「想像の共同体」としてのナッ世界を再構築する試みに見えるが、そこにおいても師弟関係が重要な意味を持つようになっており、霊媒にとって互いに相容れないナッダマズィンを黙認するというのが現状であることを示した。宮殿儀礼の分析をとおして、現在のナッ世界が統合というベクトルを持つ一方で、同時に分裂という相反するベクトルを持つと結論づけた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 山本文子 ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	中川　敏
	副 査　教授	栗本英世
	副 査　教授	白川千尋
	副 査　准教授	森田敦郎

論文審査の結果の要旨

本論考の目的は、現代ミャンマーの都市部におけるナッ（精霊）信仰を歴史的、民族誌的脈絡において分析することにある。より具体的に言えば、王朝時代に枠組みが形成された精霊（ナッ）の世界（以下「ナッ世界」とする）が、王朝崩壊後に伴い、どのように変容してきたかを明らかにすることである。

歴代の王朝は、荒らぶる世界としてのナッ世界を、王朝の（ひいては仏教の）テンプレートにあてはめ「読解可能な（legible)」(Scotte 1998)形に「規格化」した。無数のナッが「３７柱のナッ」にまとめられ、ナッをめぐる共同体は、宮廷の組織を模した（山本さんの名付けるところの）「疑似宮廷システム」へと再組織化された。さらにナッを祭る仕方（踊り方、衣装など）もまた厳密に規格化されていったのである。このような「想像の共同体」（アンダーソン 1987）としてナッ信仰の共同体を、山本さんは「大きなナッ世界」と呼ぶ。以上が２章の分析である。

近代にはいり、王朝がなくなる。想像の共同体としてのナッ共同体はなくなり、小さな、フェイス・トゥ・フェイスの共同体（これを山本さんは「小さなナッ世界」と呼ぶ）に分裂をした。無数にある小さなナッ世界の一つ、霊媒ウーキーマントゥッを中心にした「小さなナッ世界」がこれ以降の章での分析の対象になる。３章で、ウーキーマントゥッのライフヒストリー、とりわけどのようにして彼が霊媒になったかが描かれる。４章では、霊媒ウーキーマントゥッを中心にどのように集団が形成され、いかなる活動を行っているかが分析される。「小さなナッ世界」という共同体の組織原理（師弟関係）を解明するにあたり、山本さんは、ミャンマー都市部における精霊への考え方、すなわち精霊は福因として考えられるという点をあげる。他の場所、たとえばミャンマーの村落部、あるいは北タイにおいて、精霊は災因である。この違いが、ミャンマー都市部の精霊信仰共同体を特徴づけているのである。

5章では宮殿儀礼という全国から霊媒が集まる儀礼に焦点を当て、分裂したナッ世界が再び統合される局面が扱われる。宮殿儀礼では、王朝時代に成立した、ナッを王と見立てて作られた擬似宮廷システムを中心に、擬似王朝が再演されており、「想像の共同体」としてのナッ世界の再構築の試みに見えることが示される。他方で、「大臣」（疑似宮廷システムの一つの地位）の継承原理および一般の霊媒に対して導入された諸制度から、宮殿儀礼において、各々の「実践共同体」としてのナッ世界の構成原理である師弟関係が抜けがたく入り込んでいることが示される。宮殿儀礼は、「想像の共同体」としての大きなナッ世界を再構築する試みに見えるが、そこにおいても小さなナッ世界の師弟関係が重要な意味を持つのである。宮殿儀礼の分析をとおして、現在のナッ世界が統合というベクトルを持つ一方で、同時に分裂という相反するベクトルを持つと結論づけられる。

山本さんは、大都市に住む人々の中に点在する「小さなナッ世界」を対象とするという、非常に困難な状況の中でフィールドワークを積み重ねた。2年近くの長期間のフィールドワークの中で、彼女は、ある一つの「ナッ世界」の人びとと親密な関係を築きあげ、信じられない程の豊富な民族誌的な情報を集めている。そしてその豊富な情報に基づいて緻密な理論的な議論を積み重ねて、その集団形成の戦略を見事に描き出すことに成功している。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。